

# リサイクルに対する批判に反論する

——『リサイクル政策の形成と市民参加』の刊行に寄せて

寄本 勝美

## リサイクルについての意見の相違

リサイクルとは何か。その意味を「物を大切にし、どうしてもそれを廃棄せざるを得なくなった際にもできるだけその量を減らし、あるいは資源として再利用に努めることである」とすれば、こうしたリサイクル活動に異論を唱えたり反発したりする人はほとんどいないのではなからうか。ところが実際にはリサイクルについての方法や考え方に意見の相違や対立があり、しかも最近ではそれが表面化してきている。

とは広い意味を指していることは明らかである。これに対し、狭い意味でのリサイクルとは再生利用だけを指している。

## リサイクルをめぐる積極派と消極派

さて、リサイクルといえはごみの減量とか資源化に対する効果を評価する人たち（リサイクルへの積極派）とそれに消極的で否定的でさえある人たち（消極派）の二つに分けることができよう。以下においては、消極派の人たちが指摘しているリサイクルへの批判をあげて、それに対して積極派の立場の私の見解を述べてみたい。

## リサイクルの効果をめぐる再認識

第一に、リサイクルが増えても実際にごみが減っていないという指摘である。神戸大学の石川雅紀教授によれば、リサイクル量が二〇〇四年には一七・六%と一〇年間で倍になっている

ところで私は最近、有斐閣から『リサイクル政策の形成と市民参加』を出版する機会に恵まれた。この本の執筆において私が常に心がけていたのは、現実を正しく認識し、建設的な合意を築くことに少しでも貢献することであった。

もうかれこれ三〇年以上も前のことになるが、ごみ問題関連の市民集会に出席していた年配の人から私は次のようなお叱りを受けたことがある。「日本には廃品回収とか塵芥減量運動といったよい言葉がある。リサイクルという外来語は使わなくてもいい」と

が、自治体や民間団体が扱うごみと再生資源の合計量にはほとんど変化がない。容器包装リサイクル法を評価するうえで、リサイクルは進んだが、今後は主な発生抑制が重大な問題となるだろうと指摘されている。

こうした受け止め方に私は若干異論がないわけではない。確かに

品目別リサイクル率（平成 20 年度）

品目	リサイクル率	算出方法 (注意事項)
スチール缶	88.5 (平成 20 年度)	スチール缶再資源化重量 / スチール缶消費重量 (スチール缶=飲料缶+食料缶+一般缶+18 リットル缶の一部)
ガラスびん	70.0 (平成 20 年度)	再生利用量 / 国内消費量
ペットボトル	69.2 (平成 19 年度)	市町村分別収集量+事業系ボトル回収量 / 指定 PET ボトル販売量
紙製容器包装	15.4 (平成 19 年度)	紙製容器包装の回収実績 / 家庭から排出される紙製容器包装の総量 (回収率)
プラスチック容器	58.1 (平成 19 年度)	分別収集実績量 / (排出見込量 / 特定事業者責任比率) (収集率)
アルミ缶	87.3 (平成 20 年度)	アルミ缶再生利用重量 / アルミ缶消費重量 (アルミ缶=飲料缶)
紙パック	41.1 (平成 19 年度)	国内紙パック回収量 / 飲料用紙パック原紙使用量 (損紙類を含む、飲料用紙容器リサイクル協議会)
段ボール	95.5 (平成 19 年度)	段ボール古紙 (製紙受入量 + [輸出入量]) × (段ボール原紙消費量 ÷ 製紙メーカーの段ボール原紙出荷量 × 0.988) / (段ボール工場の段ボール原紙消費量 + 輸出入製品に付随する段ボールの入超量)

出所：『日本容器包装リサイクル協会ニュース』No. 46, 2009年8月

教授の言われるように、リサイクル率は昨今非常な伸びを示しており、スチール缶、アルミ缶、ダンボールのように、リサイクル率が八〇%から九〇%に達しているケースも少なくない。ただし、リサイクル率がこのように非常に高い品目は特定のものに限られており、ペットボトルやプラスチック容器、紙製容器のようなかさばる容器については、いまなおリサイクル率が高いとはいえない状況にある。

### ごみのカサと減量効果

このように確かに缶やびんのように容器包装の一部はリサイクルが進んでいるのだが、その場合リサイクルの効果は主として重さ（重量）ではなくカサ（容量）によって強調されてきた。換言すれば、これらの容器包装は重さでいうと、たいしたものではないかもしれないが、カサでいうとそれ相当の減量効果があったわけで、このこと

重要性を忘れてはならないだろう。

### 3 Rをめぐる再論

第二に、現行のリサイクル活動に対しては、分別回収される容器包装類において、環境面より望ましいものとしていないものとの区別がほとんど出ていないという批判がある。というのは、3 Rからみた場合リデュース（発生抑制）、リユース（再使用）、及びリサイクル（再生利用）という三段階に分けられている。まず発生抑制を重視し、次いで再使用を優先的に行うべきだとされてきた。しかし、様々な容器包装類のうち、どれが環境面からみて望ましいのか望ましくないのかを区別するのは難しい。

この点、私は今年九月にスウェーデンやデンマークを訪れた時に、極めて興味深い変化に気が付いた。以前には使われていなかったワンウェイびんとかペットボトルがテーブルに登場して

いたからである。これはどういうことを意味するのだろうか。つまりスウェーデンやデンマークでもリターナブルびんのように特定の種類のびんだけを使用許可するということは無理があつて、ワンウェイびんやペットボトルの使用を認めるけれども、それらの回収と有効利用は企業の責任として徹底させるという方向に変化してきている。

### リサイクルコストの見方

第三に、コストの問題がある。リサイクルというのは、コストが高くなり従って経済的に見合わない活動は成立しないし長続きしないと言われてきた。確かにリサイクルは、単独の事業としてとらえる場合には高くつきがちである。しかし、廃棄物の処理にかかる費用を合算して考えると安くなるという可能性が出てくる。私はこのことをある農家から学んだことがある。その農場では、産業廃棄物の処理業者と

しての免許を持っており、現に近くの豆腐工場からでるおからを産廃処理として引き受けていた。しかし、この農場ではおからを産廃として処理するのではなく、それを原料として肥料をつくり近くの農家に安く売っていた。こうしておからの排出者と肥料を買ってくれる農家からの収入を合わせると、このリサイクル事業は経済的に十分成り立っていたのである。

別の例をあげれば、私は一〇年前前に首都圏のある県からその県の企業局がごみの焼却で発電を行い、その場合コストはどうなるかという調査を依頼されたことがある。調査の結果わかったことは、電力を売ることによって代金だけでは到底この事業は成り立たない。しかし、焼却を引き受ける際にその処理費をもらえば、その収入と電力売却による収入を合算して事業として十分成り立つことが分かった。にもかかわらずこの事業が出来なかった

のは、一般廃棄物の処理は市町村の仕事とされており、従ってもしも県がこのような処理とリサイクル事業にのりだせば、いずれ市町村と県との間に問題が引き起こされ、時期尚早とみなされたのである。

さらに例をあげれば、早稲田大学の排出している廃棄物は業者に委託しているが、最近ではおおむねキロ二三円前後で落札されている。この額は、一般廃棄物の処理費用としては極めて安い。なぜこのように低コストなのかというと、大学の中で発生するごみの中には、コピー紙や雑誌など市場価値の高い廃棄物が多く含まれており、これを業者が売却することにより得られる収入を合算すれば、経済的に二三元前後でも十分やっていけるのだろう。

さらに、コストの問題で注目しなければならぬのは多くの自治体が行っている事業系一般廃棄物の処理をめぐる問題がある。自治体のなかには、事

業系一般廃棄物の処理料金を実際にかけた費用よりもかなり安く抑えており、その結果民間の処理施設への持ち込み量が少なくなってしまう、民間の処理事業が深刻な経営不振に落ち入っているケースがある。このようにごみ処理料金を安くするということは、サービスという点からすれば一定の意味をもつけれども、リサイクルの経済的な側面から見れば、民間の事業を妨げる大きな要因ともなりがちである。

### 市民の負担に対する多治見市からのレポート

第四は、市民の負担についてである。リサイクルというのは「分ければ資源、混ぜればごみ」といわれるように、種類や大きさ、あるいは色、材質などに基づいて分けることが極めて重要なことである。けれどもそれは市民に負担をもたらすという批判される分別収集のひとつの問題点としても指摘され

多治見市政満足度調査ベスト3

年度	2001	2002	2003	2005
1位	医療体制・保健活動	ごみ減量・リサイクル	ごみ減量・リサイクル	ごみ減量・リサイクル
2位	ごみ減量・リサイクル	医療体制・保健活動	廃棄物施設整備	廃棄物施設整備
3位	文化施設整備	文化施設整備	文化施設整備	医療体制・保健活動

2004年度は中断。2005年結果は集計中で暫定順位

ることがある。しかし、こうした問題に関してには次のような注目に値するリポートが多治見市の職員によって発表されている。

同市では以前から再利用資源の分別

収集への市民の協力を求めるとともにごみ収集有料制をも実施してきた。ところが二〇〇〇年には六分別から二三分別収集に切り替え、さらに市民が再利用資源を持ち寄る回収ステーションの数を減らして、分別収集のコストを下げるなど市民にとっての負担を一層増やすような方策をとった。これに対する市民の反発が強くなり、またこのリサイクル行政を担当している環境課に対する風あたりも強まると思っていたが、二〇〇一年から実施されている同市が行う四五の行政サービスについての「市政満足度調査」をみると、「ごみ減量・リサイクル」は、最も高い満足度を示している。

### 巨大タンカーとリサイクル社会の建設

以上、リサイクルに批判的な意見と、それに反論する私の考え方をまとめてきた。今回出版した本の「あとが

き」でも述べているが、日本の国を船にたとえれば、巨大なタンカーとなる。このタンカーは急に進路を変えることはできないかもしれないが、リサイクル社会をつくるという目的に向かって力強く進んでいくことが望まれるのはいうまでもないだろう。

〔注〕

(1) 第二回容器包装3R推進フォーラム in 神戸・報告書、平成一九年九月

(2) 仙石浩之「容リ法見直し議論と多治見市の実際」『月刊自治研』二〇〇五年一月号

(よりもと・かつみ)

早稲田大学政治経済学術院教授)

寄本勝美「著」

『リサイクル政策の形成と市民参加』

A5判、二八四頁、定価五〇四〇円(税込)

●好評発売中